

---

# 回る日々。

ティーア

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】  
回る日々。

【コード】  
N0422Y

【作者名】  
ティーア

【あらすじ】  
同じ時間を繰り返している少年の話。

「お前、昨日のテレビ見た？・・・ん？ドラマだよ、ドラマ。あれの続きどうなると思う？」

また、同じ。

「・・・って、どうしたんだよ、その腕。怪我したのか？」

また、同じ。

「ホントどんくさいなあ・・・。気を付けろよ」

自分はいつもの受け答えをして、作り笑いを浮かべた。

同じ言葉、同じ展開、同じ結果。ずっとずっと自分だけが同じ日、時間を過ごしている。

本来ならもう冬になっていてもおかしくないのに、まだ六月の蒸し暑さの中。異常な事だとは思うが、自分では何をどうする事も出来なかった。

今、八時二十一分。この二十分ほど後に、担任は来る。そしてまた同じ話を聞かないといけない。

こうして考えている間も、友達との会話は続いている。ほとんど意識なくとも、自動的に言葉が出るようになってしまった。何十日も繰り返し返せば、いくら記憶力の悪い自分でも覚えられるらしい。

これから起きるであろう出来事を、もう一度思い返す。さして特別でもない上に、別に何も起こらないが、タイムスケジュールでも思いついておけばこの時間が長く感じるようになる。時間がどれだけ呪わしいモノか、再確認できる。

友達に悟られないように、同じ日付を示したまま止まっている時計を見ると、まだ半と四十三秒。

着々とクラスメイトが集まりつつある教室で、自分はまだ独り言を続けている。目の端に映る人の順番は、変わらない。そんな事をしている内に、別の友達も集まってくる。

別に自分がこうしなくてもいい事はわかってる。一人で別の所にい

ても、学校をサボっても、何をしたっていい。制限はない。ただ、結果が同じ。今日に戻る。だからもう、無駄な足掻きをやめて同じ時間を過ごす事にした。結果が全てとはよく言ったものだ。

「はい、ホームルーム始めるよー」

四十二分二十二秒になって、担任が来た。

皆が順番に座っていく。これから何のアクションも起こさなければ、自分はゆっくりとした時間の中で同じ授業を受ける事になっている。まるで罰ゲームのようだけど、抜き打ちテストの答えを知っているだけで少しはマシ。

委員会への連絡を終えた担任が教室を出ると、いつもと同じ人から教科書を取り出したり会話を始めた。

五時三分と十四秒。

友達と帰る方向が違う自分は、一人で帰路についている。あと少し歩けば、もう自分の家が見えてくる。だけど、どうせ帰れないのだから。

少し広い道を横断しようとする。

けたたましいブレーキの音が響いたと思ったら、自分は宙を舞っていた。目まぐるしく回る視界に自分の欠片が映る。コンクリートに打ち付けられる痛みも感じない。

ブラックアウト。

目覚ましの音で目が覚めた自分は、日付を確認する。やっぱり、昨日であり今日だった。

布団を畳んで起き上がる。

何をしたって変わらないというのは、今日必ず自分は死ぬからだ。必ず死んで、また戻ってくる。まるでゲームのコンティニューだ。きつと知らない内に“はい”を選んでいるんだろう。

制服に着替えて、自分は部屋を出た。

「あ、おはよ。兄貴」

何の代わり映えもしないというのも相当な苦痛で、だから今日はマ  
ーガリンではなくジャムでパンを食べてみる。ついでに違うチャン  
ネルのニユースを見ることにした。

「その腕、平気？まだ痛いでしょ」

お母さんもテールブルに着く。時間はぴったり。

「てかさ、昨日ちよつと転んだだけなのに大げさな気がする。フツ  
ー、包帯なんてしないような・・・」

弟の指摘は、いつ聞いても正しいと思う。出血こそしていたような  
気もするけど、傷は浅かった。ただでさえ夏服なのに、これじゃあ  
見て下さいと言っているようなもの。

「大きな絆創膏でも足りなかつたんだから、文句言わない」

「誰も文句言つてねー」

そんなやり取りに作り笑いを浮かべながら、自分は十回に一回は見  
るニユースに意識を傾ける。

今日も最後には死ぬ。何が原因なのか、どうして命日を繰り返さな  
ければいけないのか全くわからないが、それが自分に課せられた事  
実。そういえば、死に方も選べたような気がする。

「あ、やばっ」

弟が席を立つと同時に、自分もテレビを消して一度部屋に戻る。

「パパー、起きなさい！」

一気に騒がしくなったマンションの一室から、自分は退場した。

「兄貴、気を付けるよ！」

そう言つて弟は階段を駆け下りていく。よく考えたら、これは小さ  
な死亡フラグだった。

弟より時間に余裕のある自分は、エレベーターを使って下へ。途中  
で乗ってくる三階の人は、相変わらず不機嫌そうだ。

十分程の距離にある学校は、いい加減見るのも飽きてしまった。こ  
の二年と半年以上、よく耐えられたと今更ながら感心する。自分は

何が楽しくてここに来ていたのか、もう思い出せない。

3-Fの教室に入って鞆から荷物を取り出していると、例の如く友達が来た。

「お前、昨日のテレビ見た？」

ジャムでパンを食べようが、違うニュース番組を見ようが、この程度では台詞は変わらない。

「ん？ドラマだよ、ドラマ。あれの続きどうなると思う？」

結局、続きに関しての答えはない。

「・・・って、どうしたんだよ、その腕。怪我したのか？」

この傷は永遠に治らない。

「ホントどんくさいなあ・・・。気を付けろよ」

自分がドジなのは認めるけど、どんくさいのは否定したかった。

作り笑いを浮かべた自分は、怪我をした方の腕に触れる。最初は痛かったのに、今では何も感じない。慣れっというのは、とても恐ろしい。

何の意味もない会話を、ただひたすら続けて時間を潰す。こうする事以外何も思い付かない自分が恨めしい。

「はい、ホームルーム始めるよー」

せめてもう少し自分の頭が良かったら、何か変わっていたのかも知れない。それはいつも思う事で、今更どうしようもない事だった。

自分の成績を見れば、誰だって一瞬で理解できる程、悪い。

教室内を見渡して、皆がいる事を確認する。誰か気付いているのだろうか。同じ時間を彷徨っている事に。いや、もしかしたら自分以外誰も彷徨っていないくて、皆はもう卒業もしているのかもしれない。あと半年後控えていたはずの受験だって、終わっているのかもしれない。そう考えると、居た堪れなかった。

「どうしたの？」

席を立った自分は、適当な言い訳をしながら教室を出て行った。

自分がどうしてこういう事をしているのかわからなかったけど、ホームルーム中で誰もいない屋上に出た時にはつきりした。

自分は泣いていた。

それに気付いた途端、自分はそこから動けなくなった。

どうして自分だけがこんな目にあわなくてはいけないのか。どうして自分だけが同じ日ばかりを過ごして、最後には死ぬのか。こんなのは始めから思っていた事だけど、今になって酷く重荷に感じた。もう嫌だ。

涙を拭って顔を上げると、長く忘れていた風景を見た。そういえば、ここにはこうなってから始めて来た気がする。

校庭側の柵にもたれ掛かって、下と正面を眺める。ここに来たからって、何か変わるのだろうか。

色々考える内に、チャイムが鳴って一時間目が始まった。でも、自分は戻らない。このまま帰ってしまおうかとも思ったけど、鞆がなかった。持って来ればよかった。

体操着の生徒が校庭に散らばって、またまとまって。どうやら、こんな暑い中野球をやらされるらしい。体育の日じゃなくてよかった。汗かくのは、あまり好きじゃない。

日陰に移動する。

これからの行動は、何をしたらいいのか自分でもわからない。よくよく考えたら、どうして屋上を避けて今まで繰り返してきたのか不思議でならない。湿度が高くてじめじめした教室から逃げるため、使っていたはずなのに。

校庭の騒がしい声を聞きながら、深呼吸をする。

こんなに穏やかな気分になったのは、いつ振りだろうか？繰り返さない可能性が出てきたからかもしれない。ようやく次の日、もしくは完璧に終わる。そんな希望が。

膝を抱えながらこれからどうしようか考えていると、段々眠くなってきて自分は目を閉じてしまった。

「おーい、ねぼすけ。おつきろー」

上から声が降ってきて、自分は目を覚ました。

「昼だぞ、昼！一緒にメシ食おうぜ」

いきなり起こされた、というか、自分は今まで寝ていたらしい。腕時計を見ると、十二時四十分。

もごもご返事をした自分は、勝手に持つてこられた自分の弁当を友達からもらう。鞆を漁ってきたんだとか。

「大丈夫か？調子わりいなら帰れば？」

首を横に振った自分は、弁当を広げて「いただきます」と呟いた。

「お前さ、たまには愚痴ぐらい言ったっていいんだぞ？何にも言わねえけど・・・」

こんな事言われるのは始めてで、自分は驚いてしまった。

言った本人は恥ずかしそうに遠くを見ている。

「・・・なっ、何だよ、その目！こっち見んな！」

自分がじつと見ている事に気が付いた友達は、何とも言えない表情になっていて、それでももうダメだった。

「わ、笑うんじゃないやねえ！こいつ・・・っ」

軽く殴られそうになって、慌てて謝る。それでも、自分は笑ったまままだっただけ。

久し振りに笑った。何ヶ月ぶりだろう？まだ、笑えたとは思わなかった。

渋い顔の友達に、もう一度謝る。

「いいけどさあ」

こうして自発的に喋るのも、初めての事に遭遇するのも久し振りで、酷く新鮮だった。いや、新鮮というより驚きだ。

「でも、本当にいいんだぞ？」

まだ食い下がる友達に、自分は首を振った。心配してくれるだけで十分だ。

それから、他愛のない話をしながら昼を摂っていると、別の友達まで来て一気に騒がしくなる。どうやら、自分達を探してくれていたらしい。また謝る羽目になった。

そういえば、これが普通だった。こうやって二人とつるんで、授業中何にも聞いてない上にサボって、帰りはたまに会う弟と一緒に帰って。これがいつもの毎日だった。

「、どうした？」

「そうだ、思い出した！」

空になった弁当箱を片付けた自分は、立ち上がると柵の方へ歩く。どうして忘れていたんだろう。こんなに重要な事を。自分の、事なのに。

放課後の、あの五時過ぎ。自分は本当に事故ったんだ。それから、ずっと繰り返ししてきたんだ。バットエンドのまま。

怪訝そうな顔をしている二人に、自分は聞いてみた。事故の回避方法を。すると二人は、それぞれ呆れた。

「回避つつたつてなあ・・・」

「周りに注意すればいいだけだろう？」

「やっぱり、基本的なことを守ればいいみたいだ。今度こそ、今度こそ帰ってやる。」

「・・・あいつ、やっぱり変だよな？」

「まあ、うん」

そんなコメントをする二人。

チャイムが鳴って、五時間目が始まる。急いで教室に戻ったけど、もうすでに先生がいて遅刻判定が下された。

午後の授業が終わって、放課後。校門の前で二人と別れた自分は、時計を確認する。まだ五時前だ。

事故当時の詳細こそ覚えていないけど、何となく『すごい速度で走ってきた乗用車にぶつかった』ことだけは知っている。それさえ避ければいいんだろう。

いつも事故に遭っている場所に近づくにつれ、自分が緊張してきているのがわかる。これが失敗したら・・・なんて考えたくない。

少し広い道に辿り着く。時計を見ると、二分と五十六秒。

左右を確認して、右側の遠くに赤い車が走ってくるのが見えた。ア

しだったのだろうか？

一瞬で通り過ぎた赤い車。その後、道を横断しようと一步踏み出す。  
・・・！？

モーターの音が聞こえて、思わず身を引く。自分の目の前を別の車  
が通っていった。

「おい、兄貴ー！」

恐怖で固まった自分を呼ぶ声がある。気が付いたら、その場にへた  
り込んでいた。

「ちよっ・・・大丈夫かよ」

向こう側から弟が駆け寄ってきて、自分の前に立つ。

「なに？あの車に轢かれそうになった？」

大きく息を吐いて、ゆっくりと立ち上がる。

「ったく、兄貴はホント鈍いなあ。まあ、でも、俺がいるから。今  
度は平気だな」

もう一度息を吐いた自分は、冷たくなった手を動かしながら頷いた。  
無事に向こう側に渡れて、弟と一緒に家の前まで帰る事が出来た。

だけど、玄関に入ったはずなのにそこは何故か病室で、酸素マスク  
をした自分が見えた。・・・なるほど、そういうカラクリだったん  
だ。

目を覚ました自分を見た看護婦が、バタバタとどこかへ走っていく。  
どこか、というよりナースステーションにでも行ったのかもしれない。  
い。ぼんやりとした頭で、そう思った。

自分が現状を把握する前に、さっきと同じ看護婦が戻ってくる。酸  
素マスクを外してくれた。

まるで何ヶ月も喋ってなかったかのような声で、今日が何日か聞い  
てみる。すると、三月と答えが返ってきた。どうも、時間のずれが  
生じているようだ。自分はまだ六月にいるはずなのに。

看護婦の説明によると、自分は事故に遭っていて今までずっと眠っ

ていたんだとか。全く実感が無い。でも、腕に巻いていた包帯がなくなっているのを見て、これが本当なんだと悟った。傷跡さえ消えている。

ほとんど動かない喉で無理矢理喋ったせいで、喉が痛い。

安静にしていして下さい。という指示を受けたので、そのまま横になっ  
ていることにした。

自分は、事故に遭った。それからずっと、眠っていた。ただそれだけの事なのに、何か足りない気がする。何か重要なことを忘れて  
いる気がする。それが何だったか、夢を思い出してみたいで全く記憶  
になかった。

ベッドの脇にあるテーブル。その上にある時計を見ると、十一時二十  
十分。お父さんもお母さんも弟も、家にいない時間帯だから、きつ  
としばらくしないと来ないだろう。

「兄貴!？」

だけど、そんな予想を裏切るのが弟だった。

名前を呼ぶと、制服姿の弟が駆け寄ってくる。

「い、生きてるんだよな?ちゃんといるんだよな?」

何を馬鹿な事を言ってるんだろうと思いつつ、頷く。すると、何故  
か腿の辺りを殴られた。

「このドジ!何で事故るんだよ。何で死に掛けるんだよ...!」  
そして泣き出してしまった。

弟を宥めている内に、お母さんとお父さんも来てすごい事になった。  
説教はされるわ、泣かれるわ、小突かれるわ...

しばらくして両親が外に連れ出されると、弟の愚痴と今までの経緯  
を聞く事となった。その話の中に、二人の友達の話しも出てきた。

「そういえば、兄貴事故の回避方法とか聞いたんだって?全然意味  
ねえし」

ん?そんな事あったらどうか。

「つーか、目の前で兄貴が轢かれた時はどうしようかと思った...  
。俺、パニックって兄貴家に持って帰ろうとしちゃったよ」

・・・？

「えっ？知らないって？回避方法なんて聞いてない？・・・兄貴、とうとう馬鹿になった？」

さて、これはどういう事だろう？全く覚えのない事が起きている。

もしかしたら、事故の衝撃で全部忘れたのかもしれないと言ったら、弟に爆笑された。

(後書き)

思い付きで書いた物でした。

よく考えてみたら、皆同じような日常を繰り返しているはずですよ。そんな事からテーマを得て作った小説で、まさかの一週間クオリティ。書いていて楽しかったです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0422y/>

---

回る日々。

2011年10月30日03時19分発行